

# 保育の学びに対する意識調査

— 大学生と短期大学生の比較から見えるもの —

Awareness survey for childcare learning

環太平洋大学短期大学部人間発達学科

黒澤 寿美

KUROSAWA, Sumi

IPU Women's College

Department of Human Development

キーワード：短大生と四大生の比較, 意識調査, 計量テキスト分析

要旨：本研究では、4年制大学生と短期大学部生の保育の学びに対する意識の違いを質的研究法を用いて分析した。保育士・幼稚園教諭を目指す短期大学部2年生55名と、保育士・幼稚園教員免許が取得できるコースに在籍している4年制大学2年生56名にアンケート調査を実施し、自由記述の内容を計量テキスト分析という手法を用いて分析した。

その結果、園児向けのイベントの企画運営という活動に対し、4年制大学生は、【子どもについて考える】ことができる貴重な機会としてとらえ、【表現力の育成】や【自分への自信】をもつために今回の行事に臨もうとしていたのに対し、短期大学部生は、【子どもと楽しむ】ことや、見に来てくれる【人への感謝】が今回の活動に取り組む原動力となっていた。また、来春から社会人として保育現場に就職する短期大学部生にとっては、【自分の将来】のために保育技術を磨きたいという思いや、2年間の保育の学びによる【自分の成長】を実感できる機会になることを期待していることが示された。

## I. 問題の所在と本研究の目的

### 1. 問題の所在

4年制大学における保育士養成機関のカリキュラムのあり方については、各養成校での大きな課題の一つとなっている。

現在の保育士資格取得制度において、保育士の資格取得に必要な内容は2年制課程を想定して定められており、4年制大学の養成課程であっても内容は同様である。そのため4年制大学において保育士の専門性を高めるための内容については、各大学に任されているのが現状である。平成22年の厚生労働省の保育士養成課程等検討会では、4年制保育士資格の創設も検討され、基礎的な2年間の学びの上に、さらに専門的な学びを2年間積み上げる4年制大学ならではのカリキュラムを求める声も高まってきたが、未だ実現には至っていない。丹羽（2011）は、養成校側の問題点として「4年制大学ならではの保育士養成について、明確なビジョン・理念、目指す保育者像をもち、それを実現

するための指導を行うに至っていないこと」を指摘している。

つまり、2年制養成のカリキュラムではなく、4年制養成を想定した新たなカリキュラムを創設するためには、「4年制大学における保育士養成校で目指す保育者像とは何か」について、保育の専門性を洗い出しカリキュラムを再構成する必要がある。

そのために、本研究では、4年制大学生と短期大学部生の保育の学びに対する意識の違いに着目した。

保育の総合表現活動を行った短期大学と4年制大学の学生の意識に、どのような共通点や相違点があるか明らかにすることにより、2年間の保育士としての専門性のコアの上に何を積み上げるべきかの示唆が得られ、4年制カリキュラム作成の一助となると考えられる。

### 2. 本研究の目的

本研究では、保育士養成を行っている4年制大学と2年制短期大学部において、それぞれの学生の学びに

対する意識の違いを調査することにより、「4年制ならではの保育者」を育てるためにはどのような学びが必要とされるのかについて示唆を得ることを目的とする。

## Ⅱ. 対象及び方法

### 1. 対象

A女子短期大学部に在籍し、保育士・幼稚園教諭を目指す2年生55名と、B大学で保育士・幼稚園教員免許が取得できるコースに在籍している2年生56名を対象とした。

対象とした4年制大学と短期大学部は系列大学であり、今回初めて合同で子ども向けの行事を企画運営した。学生達が企画運営する子ども向け行事「キッズフェスタ」は、短期大学部生が実習等でお世話になった園児（約500名）を招待し、総合表現活動（劇や運動遊びなど）を披露するものである。なお、この行事の準備や練習等は「特別演習（短大生対象）」「キャリアディベロップメント（四大生対象）」の授業の一環として実施した。

### 2. データ

4年制大学生と短期大学部生それぞれに、今までの学びで習得した保育技術を駆使して合同の子ども向けの行事の企画運営を行ってもらい、活動当初（9月）および行事実施後（12月）に、アンケート調査を実施した。

調査の内容は、①何のためにこの活動に取り組むか②この活動で何を身につけられると思うかについての自由記述と、学習分野への興味尺度（湯・外山2016）を利用し、非常に当てはまる7、全くあてはまらない1の7件法を用いた調査を実施した。興味尺度の項目は、感情的価値による興味、認知的価値による興味、興味対象関連の知識の各内容4項目の計12項目で構成された。各尺度の下位因子の平均値を分析に用いた。

### 3. 分析方法

4年制大学生と短期大学部生それぞれの自由記述の内容を、計量テキスト分析という手法を用いて分析した。この分析方法は、分析者の主観が入らずテキストデータの質的分析を行うことができる。本研究では、内容分析のためのフリーソフトウェアであるKHCoder2.00を用いて分析を行った。

分析手順としては、初めに4年制大学生と短期大学部生の自由記述データをテキストデータにし、それ

ぞれ別々のファイルに集約した。集約したテキストデータを用いて4年制大学生、短期大学部生別々にKHCoderで分析を行った。

分析の前段階として、強制的に抽出する語の指定を行った。例えば、「表現」「力」や「身に」「着く」のように別々の言葉ではなく、「表現力」「身に着く」として抽出されるように設定した。次に、テキスト内で表出頻度の高い語をリストアップした。

そして、リストアップされた頻出語同士の関連性を調べるために共起ネットワークを作成した。共起ネットワークを描いて探索する方法は内容分析の分野では市民権を得た方法である。（樋口2004）ネットワーク図は、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだものである。これにより、出現パターンの似通った語の組み合わせにはどのようなものがあるのかを探索した。また、出現パターンの似通った語の組み合わせを明らかにするために、階層的クラスタ分析も実施した。

### 4. 倫理的配慮

本研究は、「特別演習」及び「キャリアディベロップメント」の授業時に、学生に研究計画を説明し同意を得た。また、本研究で用いた学生の意識調査は個人が特定されないよう配慮した。

## Ⅲ. 結果と考察

本稿では紙面の関係上、活動当初（9月）に行ったアンケートのうち、①何のためにこの活動に取り組むかに記述されていた内容について、短期大学部生と4年制大学生の違いを分析する。

### 1. 頻出語の違い

短大部の学生の自由記述では、総抽出語数908、異なり語数217で、その内上位には、「子ども」(40)「自分」(18)「楽しむ」(16)「行事」(8)「授業」(7)などの語が続いている。

一方、4年制大学生の自由記述では、総抽出語数1147、異なり語数265で、その内上位は、「子ども」(39)「表現力」(24)「人前」(11)「考える」(10)「自分」(10)となっている。

短期大学部生・4年制大学生ともに、「子ども」が最上位となっている。しかし、頻出語上位の語を比較してみても明らかな違いは見当たらない。

## 2. 共起ネットワーク分析の違い

そこで、抽出した語同士の関連性に着目した共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワークでは、比較的強く結びついている語同士を自動的に検出してグループ分けして提示する「サブグラフ検出」を用いた。この図では、出現数の多い語は大きな円で示され、Jaccard係数で測定した共起の程度が強い語を線で結びそれぞれの関連性を示している。

短期大学部生の共起ネットワークは、7つのサブグラフが表れた。(図1) それぞれのサブグラフに含まれる語からカテゴリー名を以下の通り命名した。

サブグラフ01は、「子ども」「楽しむ」「見る」「笑顔」の語が共起されている。よって、カテゴリー名を【子どものため】とした。サブグラフ02は、「自分」「将来」「必要」「保育」「学ぶ」などの語が共起されている。よって、【自分の将来のため】とした。サブグラフ03は、「楽しい」「協力」「一つ」などの語が共起されている。よって、【人と協力するため】とした。サブグラフ04は、「実習」「感謝」「伝える」「お世話」「人」などの語が共起されている。よって、【お世話になった人のため】とした。サブグラフ05は、「知識」「身に着く」「持つ」「知る」「力」「喜ぶ」などが共起されている。よって、【知識を身につけるため】とした。サブグラフ06は、「行事」「学校」の語が共起されている。よって、【学校行事のため】とした。サブグラフ07は、「表現」「経験」「立つ」などの語が共起されている。よって、【経験を積むため】とした。

一方、4年制大学生の共起ネットワークは、6つのサブグラフが表れた。(図2) それぞれのサブグラフに含まれる語からカテゴリー名を以下の通り命名した。

サブグラフ01は、「仲間」「ステージ」が共起されている。よって、【仲間とステージに立つため】とした。サブグラフ02は、「保育」「出来る」が共起されている。よって、【保育が出来るようになるため】とした。サブグラフ03は、「幼稚園」「教諭」「気持ち」「前」が共起されている。よって、【幼稚園教諭の気持ちを味わうため】とした。サブグラフ04は、「堂々」「演技」「人前」「なれる」「話す」「楽しめる」などが共起されている。よって、【人前に出ることに慣れるため】とした。サブグラフ05は、「実際」「考える」「身に着く」が共起されている。よって、【実際にやることで力を身につけるため】とした。サブグラフ06は、「自分」「自信」「作る」「想像」「衣装」「歌」「使う」「全体」「身」などが共起されている。よって、【自分に自信を

もつため】とした。

短期大学部生のカテゴリーと4年制大学生のカテゴリーを比較してみると、4年制大学生は、主に自分自身の経験や成長を行事に取り組みモチベーションにしているのに対し、短期大学部生は、「子ども達を楽しませたい」「実習でお世話になった園の方々に感謝の気持ちを表したい」などの自分以外の理由が行事に取り組みモチベーションの一つになっていることがわかる。

これは、4年制大学のカリキュラムでは、2年次までに保育実習や幼稚園実習がなく、子どもと実際にふれあう機会がないのに比べて、短期大学部生は、既に保育実習・施設実習・幼稚園実習がすべて実施済みであり、実習中の子どもとの密な関わりがあったため、「子ども達のために」という思いが芽生えたのだと推測される。

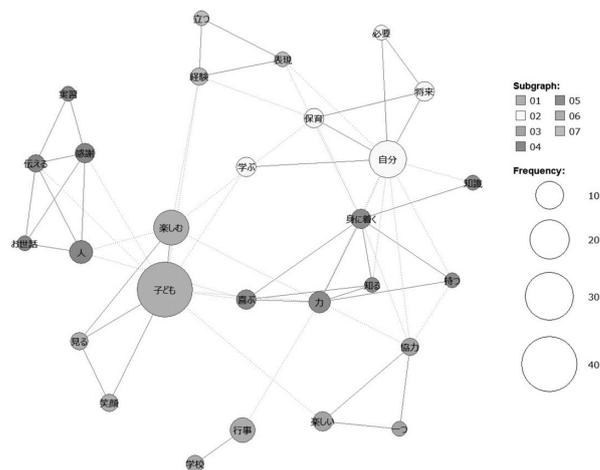


図1 短大生の共起ネットワーク

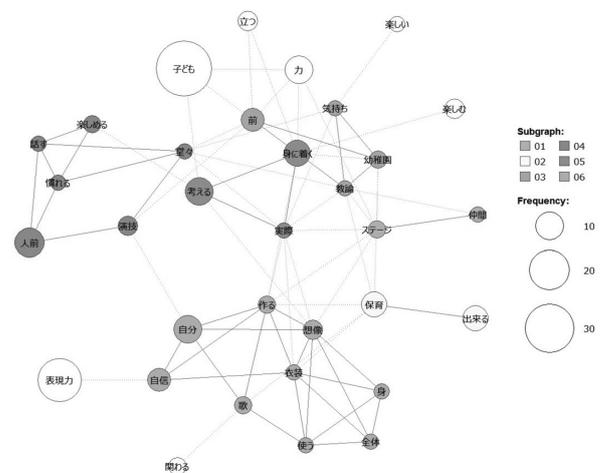


図2 四大学生の共起ネットワーク

## 3. クラスタ分析による短大生と四大学生の違い

最後に、クラスタ分析を行った。傾向を適切に把

握するために、表出される単語数がおおむね10前後になるよう、少なくとも7以上のデータで取扱があるもの（出現データ数下限7）として分析を行った。その結果、短期大学部生のデータで14単語、4年制大学生のデータで10単語が確認され、分析で布置された。クラスター分析自体はWard法を用い、単語間の距離はJaccard係数が1.2以上となるクラスター併合段階までとした。

短期大学部生のクラスターは、4つに分類された。（図3）各クラスターには、特徴を表すクラスター名を付与した。クラスター1は、「子ども」「楽しむ」の組み合わせであることから、【子どもと楽しむ】とした。クラスター2は、「保育」「自分」「将来」の組み合わせであることから、【自分の将来】とした。クラ

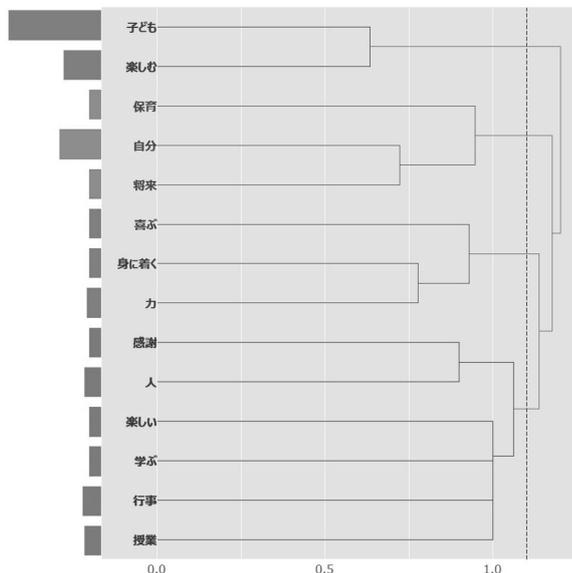


図3 短大生のクラスター

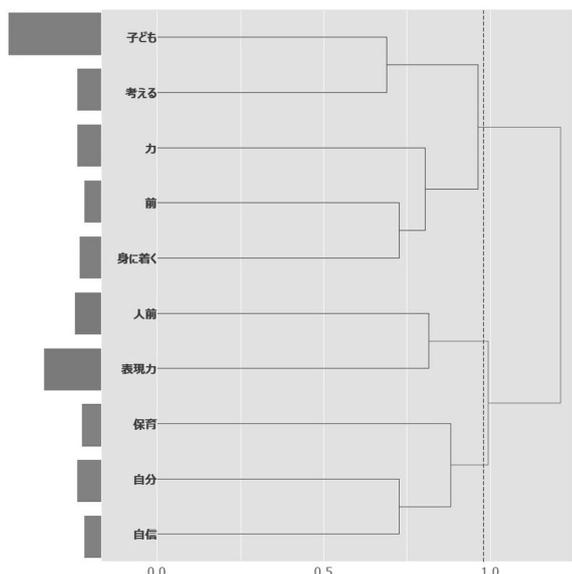


図4 四大生のクラスター

スター3は、「喜ぶ」「身に着く」「力」の組み合わせであることから、【自分の成長】とした。クラスター4は、「感謝」「人」「楽しい」「学ぶ」「行事」「授業」の組み合わせであることから、【人への感謝】とした。

一方4年制大学生のクラスターは、3つに分類された。（図4）各クラスターには、特徴を表すクラスター名を付与した。クラスター1は、「子ども」「考える」「力」「前」「身に着く」の組み合わせであることから、【子どもについて考える】とした。クラスター2は、「人前」「表現力」の組み合わせであることから、【表現力の育成】とした。クラスター3は、「保育」「自分」「自信」の組み合わせであることから、【自分への自信】とした。

階層的クラスター分析の結果から、実際に園児達に対して何かをする経験の少ない4年制大学生は、今回の行事を【子どもについて考える】ことができる貴重な機会としてとらえていることがわかる。また、今までの経験の少なさからくる不安や、大勢の人前で演技することの不安から、【表現力の育成】や【自分への自信】をもつために今回の行事に臨もうとしていると考えられる。

短期大学部生は、保育実習や幼稚園実習でお世話になった園児達を招くため、実習でたくさん関わった【子どもと楽しむ】ことや実習園の先生等【人への感謝】が今回の行事に取り組む原動力となっている。さらに、あと数か月で社会人として保育現場に就職する短期大学部生にとっては、【自分の将来】のために保育技術を磨きたいという思いや、2年間の保育の学びによる【自分の成長】を実感できる機会になることを期待していると考えられる。

## V. 今後の課題

本稿では、活動当初（9月）に実施したアンケートのうち①何のためにこの活動に取り組むか（活動に取り組む理由）について4年制大学生と短期大学部生の意識の違いを分析した。今後は、行事後の意識変化の違いや、学習分野への興味尺度との関連を分析することによって、4年制大学ならではの保育の学びはどうあるべきかを考察していきたい。

## <引用文献及び参考文献>

- 吉田幸恵（2010）「保育士養成における課題」名古屋経営短期大学紀要. 51. pp.81-94.  
丹羽さかの（2011）保育士養成課程の課題に関する一

考察～4年制大学における保育士養成課程の課題について～. 白梅学園大学・短期大学教育・福祉研究センター研究年報. NO16. pp.26-38.

樋口耕一 (2004) 「テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合—」. 『理論と方法』(数理社会学会機関紙). 19 (1). pp.101-115.

湯立・外山美紀 (2016) 「大学生における専攻している分野への興味の変化様態 —大学生用学習分野への興味尺度を作成して—」教育心理学研究. 64 (2). pp.212-217.